

他者への応答

— ヒサエ・ヤマモトの「エスキモーとの出会い」—

平石（稲木）妙子

1. ヒサエ・ヤマモトにおける異人種間関係のテーマ

ヒサエ・ヤマモトのテキストにおいて、異人種間関係は、初期の頃から繰り返し示されてきた重要なテーマである。例えば、戦前のカリフォルニアの農村地帯に住む日系移民の家族を描いた「17文字」(“Seventeen Syllables”, 1949) や「ヨネコの地震」(“Yoneko's Earthquake”, 1951) におけるように、日系人と他のマイノリティとの関係が家族関係にも影響する過程が描かれ、多人種社会カリフォルニアにおける日系人の状況が示されている。また、ヤマモトは異人種間関係を、時としてアイロニカルに描くことはあっても、「様々な民族的背景をもつ人々の間に存在する緊張関係と良好な関係の双方」(Cheung xiv) を描き、決して一面的には捉えていない。このようなヤマモトのバランスの取れた観察を可能にしたのは、第二次大戦後のヤマモトが、アフリカ系新聞の記者となって公民権運動や平和運動等にも参加し、他人種との交流を積極的に図ったことによって獲得された豊かな経験があったからであろう⁽¹⁾。

ヤマモトが最初に異人種間関係を中心テーマとして提示したのが、「ウィルシャー通りのバス」(“Wilshire Bus”, 1950) である。このテキストでは、第二次大戦後間もない時期に、主人公のエスター・クロイワがバスの中で人種差別の場面を目撃したことがきっかけで葛藤する過程が描かれている。第二次大戦中における強制収容のトラウマを抱えながらアメリカ社会へ復帰したエスターの揺らぎには、日系人の閉塞感や孤立感が映し出される。だがその一方で、注目したいのは、ヤマモトがエスターをアメリカの人種主義の被害者としてのみ捉えてはいないという点である。バスに乗り合わせた中国系移民夫妻が白人男性から差別的な言葉を投げかけられた時に、エスターは、咄嗟に「自分には関わり合いのないこと」⁽²⁾ として黙認しただけではなく、優越感すら覚えた自分の「道徳的やましき」(37) を「重大な怠惰の罪」(34) として厳しく責める。このようなエスターの自己叱責に、異人種間関係の問題を社会的背景と交差させて描くだけでなく、他者への応答という倫理的な観点からも捉えるヤマモトの視点の独自性を認めることができる。

エスターの葛藤を通して示された他者への応答という問題は、その後のヤマモトにおいて

も重要な要素であったことは、「エスキモーとの出会い」(“The Eskimo Connection”, 1983)においても認められる。これは二世のエミコ・トーヤマとユピック・エスキモーの囚人オールデン・ライアン・ワルンガとのほぼ2年に及ぶ文通物語である。ヤマモトの後期に書かれたこのテキストについては、これまでのヤマモト研究では単独で取り上げられることも少なく、評価も曖昧なままにされてきた⁽³⁾。しかし、このテキストには従来のヤマモトには見られない新たな要素がある。まず、第一にヤマモトは、このテキストにおいて日系人とアラスカ先住民との関係を初めて取り上げている。このテキストは1970年代半ばに設定されているが、この時期はいわゆるレッド・パワーによる先住民の権利回復運動が進展した時期でもあり、それらに対するヤマモトの関心がこのテキストを通して伺える⁽⁴⁾。さらに、このテキストはヤマモトの代表作とは異なり、二世の日系少女の視点からではなく、当時のヤマモトとほぼ同世代の中年の主婦であるエミコの視点から語られている。オールデンのエミコ宛ての手紙からの直接的な引用はごくわずかであり、彼の手紙の内容については、もっぱらエミコの関心と解釈に基づいて語られる。エミコが「詩を書くことではなく、孫たちの世話をすることが仕事のようにになっている」(96)主婦とはいえ、詩人らしい鋭さと繊細な感性を持ち合わせていることは、オールデンへの観察を通して次第に明らかにされる。このように「エスキモーとの出会い」は、オールデンの物語であると同時にエミコの物語として読むことも可能である。そこで、このテキストをエミコに焦点を合わせて再読することで、1970年代から80年代にかけて日系社会が変化する中でヤマモトが初期から探ってきた他者への応答という問題をどのように捉えていたのかを検討し、作家として成熟期を迎えていたヤマモトのヴィジョンを明らかにしたい。

2. 他者からの呼びかけ——「エスキモーとの出会い」——

中西部にある連邦刑務所に収監されているオールデンは、アジア系雑誌に掲載されたエミコの詩を読み、「アジア系アメリカ人に仲間意識をもって」(96)、刑務所内の新聞に投稿した自分のエッセイを「批評」して欲しいと手紙で要請してくる。23才の「辛酸をなめたに違いない若者」(96)と「中年の未亡人」(96)である自身との間に何ら接点を見いだすことが出来ず、エミコは直ちに返事を書く気にはなれない。その上、彼のエッセイは「論点が著しく曖昧で」(96)、言葉遣いも不正確であるためエミコは辟易する。しかし、オールデンのエッセイに見出される「両極端の苦しみ」(102)を感じ取ったエミコは、最終的には、エッセイに対して短くコメントを書いて、二人の文通が始まる。そもそもオールデンがどのような罪を犯して刑務所にいるのかも知らされないまま、彼から送られてくる手紙だけを手掛かりにエミコは彼の内面を探るようになる。

オールデンのエッセイでエミコが最初に強く印象付けられたのは、「生まれ育った土地の略奪に反対する強い感情的な叫び」(96)である。「土地の略奪」に対するオーデンの怒りは、

1970年代のアラスカにおける先住民社会との関連で捉えると、決して彼の一時的な個人的感情の爆発によるものではなく、先住民が抱えた「集団的トラウマ」(Roderick 70)に連なるものであったことが明らかにされる。アラスカでは、1968年のブルードベイにおける油田発見を契機に、油田開発のためにパイプラインの敷設が必要となり、それまで曖昧にされてきた土地の権利関係を明確にする必要が生じた。この結果、1971年に「アラスカ先住民土地請求権解決法」が制定される。しかし、この法律によって先住民の生活は保障されたものの、実質的には先住民にとっては不利な状況が作られていった。本来ならばこの法律によって先住民に土地の所有権が与えられることになっていたが、実際は、先住民はあらかじめ定められた集落に登録され、土地は特定の地域会社の所有という形が採られた。その結果、先住民が普段使用しない土地は地域会社の所有となってしまったのである。

この法律によって、先住民の伝統的な遊動生活は不可能となり、先住民の生活は一変する(Fienup-Riordan 31)。特にオールデンのようなユピック・エスキモーの間では、アルコール依存や自殺、犯罪の増加などが見られたという(Napoleon 137)。アラスカ先住民文学を代表する作家ヴェルマ・ウォーリスによる自伝『私たちの自立』(*Raising Ourselves: A Gwitch' in Coming of Age Story from the Yukon River*, 2002)においてもこの時期の先住民の「喪失感」⁽⁵⁾が如何に大きなものであったかが詳細に語られている。ウォーリスは、「1970年代はフォート・ユーコンでは皆が飲酒を始めていた」(179)と述べて、土地請求法後の精神的な荒廃を詳細に語っている。土地請求法が制定された後、父のアルコール依存が家族を苦しめ、やがて母も「生活保護のお金を飲酒につき込むようになり」(177)、家族やコミュニティ全体に負の連鎖が広がったという⁽⁶⁾。ウォーリス自身もこの状況に耐えきれず自殺を考えるようになり、自らも酒に依存するようになった(179)。このような70年代におけるアラスカ先住民の状況を踏まえると、オールデンがアルコール依存で苦しんでいることや、うつ病の治療で大量の抗うつ剤を服用していることなども、土地請求法後におけるアラスカ先住民の状況とパラレルになっていることがわかる。

一方でエミコは、オールデンが自己再生を求めて「両極端の苦しみ」からの解放を必死に求めていることも知らされる。刑務所内でオールデンがキリスト教を受け入れたのもその一例である。オールデンは、聖書の勉強に日々熱心に励み、「キリストのことばに関する研究」が自分の「人生の最優先事項だ」(97)と説明して、信仰に邁進する様子をエミコに伝える。しかし、エミコはオールデンが真剣に聖書を学んでいるにもかかわらず、キリスト教は必ずしも彼が求めていたような精神的な安定をもたらすものではないことに気づかされる。例えばオールデンは、「欺瞞に関わるある種の精神的危機」(99)に陥っていたために、手紙が一時的に書けなかったとエミコに説明する。また、別の手紙では、「イエス・キリストからそれることを自分の心に許してしまったから」(100)として、信仰が揺らぐ自分に困惑していることをエミコに伝える。キリスト教とアラスカ先住民との複雑な関係については、先のウォーリスも言及している。自分たちの伝統的な宗教を信じ続ける父とは違って、キリスト教を受

け入れた母の影響でウォーリスも教会に通うようになった(27-29)。だが、途中で教会の指導者たちの先住民への差別的な発言に不信感を抱くようになり、教会に行くのもやめたと述べて、キリスト教への不信感を示している(177)。

エミコは、オールデンが信仰で揺らぐ背景には、彼がユピック・エスキモーとしてのアイデンティティを強化したことと関係しているのではないかと推測する。例えば、オールデンは、刑務所で「アメリカン・インディアン・アルコール依存症患者救済協会」のメンバーとなって、「その霊的側面を楽しんでいる」(100)とエミコに報告する。仲間とダンスを楽しみ、「アメリカン・インディアンの同胞意識をもって」(100)パウワウにも参加したとして、刑務所内での先住民同士の交流が、オールデンに解放感を与えている。自身の信仰について書く時の深刻で重苦しい文章とは異なり、先住民同士の交流について触れる時のオールデンは、年令に相応しい躍動感をエミコに伝える。先住民との触れ合いがオールデンを孤立感やスティグマから解放するのに大きな力となっていることがわかる。

このような変化に応じて、オールデンはエミコに、ピーター・フロイケンの『エスキモーの本』(1961)やアラスカ先住民についての研究書を読むように勧めるが、それは両方とも「彼の民族を正確に表しているからである」(97)と説明する。ユピック・エスキモーとしてのアイデンティティを強く意識するようになって、オールデンは、自分たちの伝統への誇りを取り戻し、それらへの理解をエミコにも求めるようになったのである。1960年代の公民運動やそれに触発された1970年代の先住民による運動の発展で、アラスカの先住民も政治的結束を固めて、民族意識を募らせた影響が、オールデンにも認められる。

さらに、キリスト教とエスキモーの伝統文化との間で引き裂かれているオールデンの状況には、1867年にアメリカの領土となった後に強力に推進された同化政策の反映がある点も見逃せない。その中心となったのが公教育における伝統的な部族の言葉の使用禁止であった。こうした同化政策がエスキモーに与えた影響は大きく、1970年代以前に学校教育を受けたアラスカ・エスキモーは「母語にまつわる屈辱的な記憶」(宮岡 200)に苛まれていたという。オールデンもそのようなトラウマ的経験を持つ世代に属しており、同化政策による抑圧がオールデンにもその痕跡をとどめている。キリスト教を信仰し、忠実な信者になることを求めながら、先住民同士の「霊的交流」や伝統的行事に心躍るオールデンの分裂した心理にそれが象徴されていると言えよう。このような二つの文化の境界線上に揺らぐオールデンの葛藤をエミコが敏感に読みとったのは、エミコ自身も若い頃、同じように異なる文化の狭間で揺らぐ経験をしたからに相違ない。

以上のように、オールデンの「両極端の苦しみ」には、アラスカ先住民の歴史が反映されていることが明らかにされたが、同時にヤマモトはオールデンが負っている内面の傷がエミコのそれにも通じるものであることを示唆している。例えばエミコは、オールデンが収容されたマックニール刑務所の規則書を読みその体制に疑義を呈している⁽⁷⁾。刑務所に外部から本を送る場合は、宗教関係のものに限定されており、読書好きのオールデンにとっては耐え

がたい状況であることを、エミコは刑務所の規則を読んで知らされる。実際、エミコがオールデンにアジア系アメリカ文学の雑誌を送った時も送り返されてしまう。刑務所に何かを送る時には、刑務所の教戒師からの許可が特別に必要であることなど細かい規則があることを知ってエミコは苛立つ。刑務所の抑圧的で煩雑な管理体制を知らされたエミコは「冷たい手に触れられたような気がした」(98)と不快感を覚えてもいる。このテキストにおいて、エミコの強制収容所体験について触れているのは一箇所のみであるが、刑務所の規則に対してエミコが批判的に捉えているのも、厳しい監視のもと、自由を剥奪された監禁生活を強いられた強制収容時代のエミコの経験があったからであろう⁽⁸⁾。監禁状態にある人は、心理的に「ダブルシンク」という複雑な状態に陥るという(Herman 132)。「相矛盾した複数の信念を同時に保持する」ことで苦痛や恐怖、屈辱感などを抑制しようとするからである(Herman 132-133)。エミコがいち早くオールデンの「両極端の苦しみ」に気がついたのもエミコの収容所での経験があったからに相違ない。

もともとエミコは、刑務所や死刑制度に対して批判的であった⁽⁹⁾。エミコは「刑務所が囚人の犯した罪に対する解決策にはならない」(99)と確信し、『『更生しやすい社会』を求める賢人の意見』(99)に賛成しているからである。ここで注目したいのは、この「賢人」とは、カトリック・ワーカーの創始者であったピーター・モリンを指しているという点である⁽¹⁰⁾。「更生しやすい社会」は、カトリック・ワーカーの運動の基盤になったモリンの言葉であり、ヤマモトもこの運動に参加した事実を踏まえると、ヤマモトはエミコに自身の理念を反映させていると思われる。カトリック・ワーカー運動は、1933年にピーター・モリンとドロシー・デイによってはじめられた社会運動で、非暴力による平和運動を進めていた。また、社会で周縁化された弱者の救済を通して宗教と政治の融合を目指したものであった。エミコがこの運動の理念に影響を受けている点は、次のエピソードからもわかる。1年前に、「体制に幻滅し、自分たちの手で何とか問題を解決しようとした」(99)5人の若者たちが家のなかに閉じ込められ、警察によって生きたまま焼き殺された時の市長の発言をエミコは思い出す。事件後、「家に被害を受けた近所の人たちに補償することが、道徳的に正しい」(99)と述べた市長を、エミコは批判的に捉えている。市長が定義する「道徳」とは何を意味するのか、エミコには理解できないからである。他方で若者たちが社会に絶望した理由には、まったく無関心な市長のご都合主義に、エミコは違和感を覚えてもいる。また、エミコは社会全体の状況に対して違和感や危機感を抱いてもいる。「いつの間にか伝わるなにか、明らかに人から人へと伝わるなにかがあった」(98)とエミコは感じ、「なにかさらに別のことが起こりそうだった」(98)として今後に一抹の不安を抱いてもいる。刑務所で孤独に葛藤を募らせるオールデンに対してエミコが共感を覚えるようになったのも、エミコ自身が日常的に感じている不安や孤立感のゆえであったことが了解される。

3. 他者との距離

以上のようにエミコは、オールデンからの呼びかけに応じて、文通を重ねる過程で彼との距離を次第に埋めていく。しかし、ここで見逃せないのは、エミコが同時にオールデンとの関係には制約もあり、限定的であることを意識している点である。エミコとオールデンには二度ほど面会の機会があったにも関わらず、両者は最終的には会うこともなく物語は終わってしまう点に、それが端的に示されている。最初に面会の機会が訪れたのは、オールデンが、マックニール・アイランド連邦刑務所に移送されることになった時のことである。移送の途中で休憩をとる場所でエミコに会いたいとオールデンから要請があり、初めてオールデンに会うことができる機会だったが、エミコは、「新たに生じた家族の危機的状況で行き詰っている」(100)として、オールデンとの面会に行くことを断ってしまう。だが、その直後にエミコは「後ろめたさを覚えて」(100)、面会を断るべきではなかったと後悔する。このようなエミコの罪悪感は、オールデンに対して、当初の逡巡は消えてエミコなりに応答をしなければならぬという気持ちが芽生えていることを示すものである。

しかし、エミコはオールデンに対して共感を募らせつつも、一方で、主婦として日常生活を常に優先させる。次々と起こる「現代家族が抱える雑事に取り紛れて」(104)、オールデンからの手紙が途切れてしまっても、それに気がつくのは、時間が経過してからの事である。また、「家族にいつもなにかしら余計な事が起こった」(100)ため、その対応に追われる毎日をエミコは送っていることが繰り返し強調される。エミコは家族が次々と引き起こすトラブルを1人で処理しなければならず、詩を書く余裕もない。従って、オールデンが「閉塞状況にいるわりに精神的には、澆刺としている」(98)点や通信講座なども受けて意欲的に学び、精力的に創作も行っている状況を、エミコは不思議に思うほどであり、エミコが家庭という檻に閉じ込められていることが分かる。

オールデンとの二度目の面会の機会は、エミコの友人の息子がシアトルで結婚式をあげることになり、友人夫妻とシアトルに出かける際に訪れる。エミコは、シアトル近くのマックニール連邦刑務所にいるオールデンの面会予定者名簿に記載してもらうように申しこむ。だが、出発までに面会の許可書は送られてこなかったため、二度目の面会も実現できずに終わる。皮肉にも、シアトルから帰宅した後、エミコは面会予定者リストに自分の名前が掲載されていることを刑務所からの通知で知るが、シアトルを訪れる機会は二度とないエミコとしては複雑な思いでこの通知を受け取る。

以上のようなエミコとオールデンのすれ違いは何を意味しているのだろうか。ヤマモトは、オールデンに対して可能な限り応答するエミコの様子を描きつつも、その一方で両者の差異を浮かび上がらせる。例えばエミコは、亡くなった夫が遺した保険で、豊かではないが、それなりの生活を送っている。このようなエミコの生活は、戦後の日系人が特に1960年代以

後、「モデル・マイノリティ」と呼ばれてその社会的安定や上昇が注目された状況とも呼応している。次々と「マリファナ、結婚しないままの同棲」(98)など、子ども達が引き起こす問題の対応に追われながらも、家族に囲まれたエミコの日常は、刑務所に入るほどの罪を犯したオールデンとは対照的でもあり、両者の差異は明白である。ヤマモトは二人の置かれている状況の相違を通して、マイノリティ同士が社会的、人種的差異を乗り越えて相互浸透的な関係を構築することは容易ではないことを示唆している。

だが、ヤマモトはマイノリティ間の相互理解や関係の構築の困難を単に暗示するだけで終わっているわけではない。それは、テキストの結末に挿入された、オールデンが送ってきた短編物語「1974年の棺」からの抜粋文によって明らかにされる。物語は、ベーリング海を飛んで渡ってきた「ユキホウジロ」の描写で始まる。最初にまず、アラスカの静かな冬の風景が描かれる。「春の歌をうたいながら」(103)ベーリング海を飛んでやってきたユキホウジロは、春の訪れに伴う躍動感を予感させる。季節ごとに海をわたりながら次の居場所を求めて軽やかに越境するユキホウジロの逞しい生命力に対するオーデンの憧憬の念がここでは示されている。

次に、物語は一転して異様な光景の描写に移し、「6人の薄黒い肌の人々」(103)が棺を運ぶ様子が描かれる。「押し黙った雲」や「殺されたセイウチの生臭い臭い」(103)など重苦しく、残忍さも漂う暗い風景とも相まって、周囲は死の臭いに満ちており、先の風景とは対照的な世界に一変する。棺に入っている亡くなった男の母の悲しみや男の犯した殺人については、ごく短く触れられてはいるものの、詳細は一切省略され、荒涼とした土地に根ざして生きる人々の苛酷な運命が映し出される。しかも、棺の中に入れられていた男は、その後、奇跡的に再生するという結末で物語は終わる。殺人を犯したその男は、「罪を洗い清められ、キリストのなかで再生し、新しい人間となった」(103)と書かれ、罪を犯した男、すなわちオールデン自身と思われる男の再生が最後に高らかに謳われる。生と死、明と暗とが混在するこの物語を読んだエミコは、オールデンの「両極端の苦しみ」を再び感じる。そして、オールデンは、叔父を殺したうえにその娘をレイプして殺すという残忍な罪を犯したことが暗示される。

ヤマモトは、以上のようなオールデンの物語からの抜粋文を結末に挿入することで、エミコのオールデンに対する応答の意義を提示している。ジュディス・ハーマンによるとトラウマを抱えている人の回復は、自身のトラウマ的経験を語ることによって可能になるという(Herman 175)。凍りついてしまった記憶を「言語による、具体的な、有機構造を持った、時間の前後関係と歴史的な脈との方向づけ」に基づく物語を構成する過程で、失っていた世界を取り戻すからである(Herman 177)。従ってオールデンが自身の過去を語り直す物語行為は、彼の回復の第一歩となるものであり、その契機となったのがエミコとの文通であったと思われる。自分の犯した罪について沈黙をしていたオールデンがトラウマ的経験を物語化することが可能になったのも、エミコの応答があったからである。

しかし、ヤマモトはエミコの応答が果たした役割を明らかにしつつも、オールデンとエミコの関係には最後まで一定の距離が保たれている事をも繰り返して示し、単なる異人種間の友情物語としてテキストを終わらせてはいない。実際、シアトルの刑務所から故郷のアラスカに移送された後、二人の文通は一気に終息にむかう。エミコが最後に受け取った手紙には、刑務所のスタンプはなく、通常の切手が貼られていたことから、オールデンは仮出所が認められたのかもしれないとエミコは想像する。そして、オールデンが故郷のアラスカに戻ることで、家族の面会も受け、「主なるイエス・キリストにしっかりと従い、他のことに気をそらすことなく」(104) 忙しくしているだろうと想像し、文通が終わったことを特に感傷的に捉えることもなく、冷静に受けとめている。

「エスキモーとの出会い」は、1970年代から80年代にかけて強制収容の補償を求めたりドレス運動の進展によって日系社会が変化した時期に書かれたものである。この時期には、ドレス運動を通して、他のマイノリティとの連帯を強化する運動を進める日系人のアクティヴィストが登場した。例えば、エディソン・ウノのように、60年代からドレス運動を始め、その後、アルカトラズ島を占拠したインディアンを援助する委員会を組織し、サンフランシスコで抵抗運動を行う二世の日系アクティヴィスト達もいた(Murray 187-188)。また、アリゾナからの強制的移転を拒否したナホバの人々をサポートする運動を担う日系人も登場した(Murray 440)。さらにこの時期には、日系アメリカ文学でも、ローソン・イナダやジャニス・ミリキタニのような文学の政治性を意識した「三世のアクティヴィストの作家たち」により、日系文学の新たな潮流が形成された(Yogi 140)。

このような他民族との政治的連帯を求めるようになった日系社会の変化をヤマモトは、どのように捉えていたのだろうか。それを検討する上で示唆的なエッセイが1986年に書かれたヤマモトのエッセイ「黄葉」(“Yellow Leaves”)である。このエッセイで、65才の誕生日を迎えたヤマモトは自身の老いを痛感しており、自分たち二世が「消えゆく世代」であるとしながらも、ジョージ・ヤマダやユリ・コチヤマなど依然として活発な社会運動を行っている二世に対する尊敬の念を表明している。また、日系人以外で尊敬できる人としては、ドロシー・デイやマザー・テレサ及びガンジーなどの指導者の名前を挙げてもいる。ヤマモト自身も、反核デモの集会に参加したり、デイについての会議にも参加しており、自分の理念や投票をしないという政治的な信念にも変化はない。だが、自分はそれらの集会に参加しても、隅に座ったり、柱の陰に身をよせて目立たないようにしていると述べる。それは、「私が闘うための確信に欠けている」わけでは決してなく、「陰鬱な世界の状況で、私は今もなおこれが唯一の方法だと確信している」(38)と続けて、運動に対しては距離をおいて参加していることを表明している。このような距離感とは、単に、「消えゆく世代」の一人となったヤマモト自身の老いの自覚や、アメリカ社会の現状に対する諦観として受けとめるだけでは不十分であろう。ここでヤマモトが表明しているアクティヴズムへの距離感とは、先に述べたように公民権運動をはじめとする社会活動を自ら経験した後、ヤマモト自身が見出した

日系作家としてのヴィジョンに根ざしたものであると思われるからである。

以上のようなヤマモトの書き手としてのヴィジョンを知る上で示唆的なテキストが、「エスキモーとの出会い」から3年後に書かれた「フォンタナの火事」(“A Fire in Fontana”, 1986)である。このテキストにおいて、ヤマモトは『ロサンゼルス・トリビューン』の記者を辞める契機となったある事件について語っている。当時、黒人の公民権運動家として知られていたオーデイ・ショートは、1945年の秋にロサンゼルス郊外にあるフォンタナに家を購入して移住してきた。フォンタナは白人居住地区であったため、ショートは周囲の住民から嫌がらせや脅迫を受けた。そして、その3ヶ月後に、ショートの家は火をつけられ、妻と子どもは焼け死したのである。この火事が起きる直前に、ショートは『ロサンゼルス・トリビューン』に協力を求めて一家の危険な状況を記事にして欲しいと依頼してきた。ショートから話を聞いたヤマモトはその要請に応じて記事を書いたが、それからほどなく悲劇が起きたのだった。ヤマモトは、「慎重なジャーナリストの文体」(154)で「冷静で客観的な記事」(154)を書いたことを後悔し、ショートの手紙を傍観者としてしか聞けなかった自分を責めて以下のように書いている。

私になにかが起きていると感じたのはこの頃だった。でも、なにが原因でそう感じたのかをはっきりと特定することはできなかった。それは、場所を突きとめることのできないむずかゆさのようだった。または、きちんと調理されていない食べ物か、しなければならぬのにしないままになっている事柄のようでもあった。あるいは、思い出さなければならぬのに思い出せないなにかのようであった。ともかく、私の内部でなにかがうごめいていた。(154)

ショートの手紙を結果的に抹殺したことに対する後悔の念が、ヤマモトが書き手としての自身の位置を見つめ直す契機となったことがこの言葉から伺われる。政治哲学者のアイリス・M・ヤングは、『正義への責任』(*Responsibility for Justice*, 2002)において、「わたしたちが責任をもっとも根源的に経験しているのは、他の人格との具体的な出会いのなかである」(Young 162)として、「他者の現前に在ることでわたしたちは責任へと呼びかけられて」、「他者に開かれた自分に気づく」(Young 162)と述べる。エミコが社会から遮断され不可視化されたオールデンの言葉を読みとり、オールデンの手紙を伝えたように、周縁的な場所からヤマモトは他者の言葉に耳を傾け、他者の手を届けることに自身の書き手としての理念を見いだしたのである。第二次大戦後、強制収容所から解放されたヤマモトは、アフリカ系コミュニティで働き、社会運動をする過程で他人種との関係における相互の偏見や対立などに戸惑い、葛藤を深めつつもそれを見つめ直し、表現することが彼女の書くことへの情熱を支えていたに相違ない。1986年にヤマモトが、それまでの作家としての活動が評価されて、文学賞⁽¹¹⁾を与えられたのも、周縁的な位置から他者への応答のあり方を模索してきたヤマ

モトの試みが改めて評価されたからである。「エスキモーとの出会い」は、そのようなヤマモトの模索の結果、獲得された洞察によって書かれたテキストとして位置づけることが出来るだろう。

〈注〉

- (1) ヤマモトは、1945年から3年間、アフリカ系の週刊新聞 *The Los Angeles Tribune* の記者として働いた。同紙では、自身のコラム欄“Small Talk”を持ち、この間の様々な出来事や経験を綴っている。この時期には、ワカコ・ヤマウチや他のアクティビストらと一緒に人種平等会議 (Congress of Racial Equality) のロサンゼルス支部を設立して人種隔離撤廃を求めて座り込み運動を行った。Greg Robinson, *After Camp: Portraits in Midcentury Japanese American Life and Politics* (Berkeley: U of California P, 2012), 65.

ヤマモトは“Small Talk”でこれらの活動についても報告している。また1953年から2年間、ヤマモトは、息子連れてニューヨークのスタテン島にあるカトリック・ワーカークのコミュニティにも参加した。

- (2) Hisaye Yamamoto, “Wilshire Bus,” King-Kok Cheung ed., *Seventeen Syllabus and Other Stories* (New Brunswick, New Jersey: Rutgers UP, 1998), 34. 本稿ではヤマモトのテキストからの引用はすべてこの版により、ページ数のみを付す。また、本文中のヤマモトのテキストの翻訳については以下を一部、修正して使用。

山本岩夫、検原美恵訳『ヒサエ・ヤマモト作品集——「17文字」ほか18編』南雲堂フェニックス、2008年。

- (3) 最近の示唆的な論考としては、以下を参照。

Rie Makino, “Absent Presence as a Nonprotest Narrative: Internment, Interethnicity, and Christianity in Hisaye Yamamoto’s “The Eskimo Connection,” *The Japanese Journal of American Studies*, Number 26, 2015: 99-119.

- (4) ヤマモトの強制収容先はアリゾナ州にあるポストン収容所だったが、この収容所は、コロラド・リバー・インディアン居留地の一部に設立されたものであり、モハベ族とチェメウエビ族、合わせて約1,200人の先住民が住んでいた。しかし、先住民と日系人との間の交流は乏しく、日系人の多くが先住民に対して偏見や差別意識を抱いていたことは、例えば、シンシア・カドハタの *Weedflower* (2006) でも描かれている。当時のヤマモトも先住民の状況に特に関心を寄せていなかったことは、収容所内で発行されていた新聞『ポストン・クロニクル』におけるヤマモトのコラム“Small Talk”からも伺われる。1943年6月6日のコラムで、収容所内の野球チームである「パーカーインディアン」の試合を見に行った時のことについて書いている。チーム名とは名ばかりで、チームにインディアンに似た人はいるものの、実際は日系人だけで編成されているチームである。そもそも自分は、「100パーセント本物のインディアン」にであったことはないとしている。そしてインディアンの「頭皮はぎ」を持ち出して、「もっとも私の頭皮がはがされてしまわない限りは本物のインディアンかどうかはわからない」などと続けている。この際にインディアンを“it”という代名詞を用いて呼んでおり、当時のヤマモトにとってインディアンは他者でしかなかったと推察される。Hisaye Yamamoto, “Small Talk,” *Poston Chronicle*, 6 June, 1943.

- (5) Velma Wallis, *Raising Ourselves: A Gwitch' in Coming of Age Story from the Yukon River* (Kenmore, WA: Epicenter P, 2002), 170. 以下、本書からの引用は全てこの版による。

- (6) ハロルド・ナポレオンによるとユピックにおけるアルコール依存症患者の増加の要因は、精神的なものであるという。経済的な支援だけではアラスカ先住民の「怒り、罪悪感、恥辱感、悲しみ、フラストレーションや絶望感」を解消することはできないとナポレオンは指摘し、植民地化

の歴史がその背景あることを明らかにしている。Harold Napoleon, “Yuuyaraq: The Way of the Human Being,” Maria Shaa Tlaa Williams ed., *The Alaska Native Reader: History, Culture, Politics* (Durham: Duke UP, 2009), 131-137.

- (7) 1970年代にはマクニール連邦刑務所への批判が高まり、刑務所内の改革を求める運動もあった。当時、マクニール連邦刑務所は「最も孤立し、旧態依然として破壊的な刑務所の一つ」と評されていたという。同刑務所は、1981年には閉鎖された。Paul W. Keve, *The McNeil Century: The Life and Times of An Island Prison* (Chicago: Nelson-Hall, 1984), 252.

オールデンもマクニール連邦刑務所内の状況に不満を抱いて別の刑務所に移送されたことが書かれている (Yamamoto 103)。

- (8) ヤマモトは、『ポストン・クロニクル』のコラム “Small Talk” (30 May, 1943) で、強制収容の噂を聞いた時の状況を振り返り、収容所を “prison” と呼んで、正当な理由もなく収容される事への抵抗を示している。

- (9) アメリカでは、死刑制度を巡って1970年代には大きな変化が見られた。連邦最高裁は1972年、「被告の生死を気まぐれで判断している」として死刑を違憲としたため、アメリカでは1976年までは死刑が完全に廃止された。小倉孝保『ゆるる死刑 アメリカと日本』岩波書店、2011年、217。

- (10) デイによるモリンの思想についての説明は以下を参照。

Robert Ellesburg ed., *Dorothy Day: Selected Writings* (Maryknoll, New York: Orbis Books, 2002), 42-47.

- (11) ヤマモトが受賞したのは、American Book Award for Lifetime Achievement from the Before Columbus Foundation である。前年に、トシオ・モリが受賞している。

参考文献

- Cheung, King-Kok. “Introduction.” Cheung ed., *Seventeen Syllables and Other Stories: Revised and Expanded Edition*. New Brunswick: Rutgers UP, 2001, ix-xxi.
- Daniels, Roger. *Prisoners Without Trial: Japanese Americans in World War II*. New York: Hill and Wang, 1993.
- Ellesberg, Robert ed., *Dorothy Day: Selected Writings*. Maryknoll, New York: Orbis Books, 2002.
- Fienup-Riordan, Ann. *Eskimo Essays*. New Brunswick, Rutgers UP, 1990.
- Freuchen, Peter. *Book of the Eskimos*. New York: Fawcett Premier, 1961.
- Herman, Judith Lewis. *Trauma and Recovery*. New York: Harper Collins, 1992.
- Kadohata, Cynthia. *Weedflower*. New York: Simon and Schuster, 2006.
- Keve, Paul W. *The McNeil Century: The Life and Times of An Island Prison*. Chicago: Nelson-Hall, 1984.
- Makino, Rie. “Absent Presence as a Nonprotest Narrative: Internment, Interethnicity, and Christianity in Hisaye Yamamoto’s ‘The Eskimo Connection.’” *The Japanese Journal of American Studies*, Number 26, 2015, 99-119.
- Murray, Alice Yang. *Historical Memories of the Japanese American Internment and the Struggle for Redress*. Stanford: Stanford UP, 2008.
- Napoleon, Harold. “Yuuyaraq: The Way of the Human Being.” Maria Shaa Tlaa Williams ed., *The Alaska Native Reader: History, Culture, Politics*. Durham: Duke UP, 2009, 131-137.
- Robinson, Greg. *After Camp: Portraits in Midcentury Japanese American Life and Politics*. Berkeley: U of California P, 2012.
- Roderick, Libby ed., *Alaska Native Cultures and Issues*. Libby Fairbanks: U of Alaska P, 2010.
- Ruppert, James and Bernet, John W., ed., *Our Voices: Native Stories of Alaska and the Yukon*.

- Lincoln: U of Nebraska P, 2001.
- Schleitwiler, Vincent J. "Into a Burning House: Representing Segregation's Death." *African American Review*. Volume 42, Number 1, 2008. 149-162.
- Wallis, Velma. *Raising Ourselves: A Gwitch' in Coming of Age Story from the Yukon River*. Kenmore, WA: Epicenter P, 2002.
- Williams, Maria S. T. ed., *The Alaska Native Reader: History, Culture, Politics*. Durham: Duke UP, 2009.
- Yamamoto, Hisaye. *Seventeen Syllables and Other Stories: Revised and Expanded Edition*. New Brunswick: Rutgers UP, 2001. 山本岩夫, 桧原美恵訳『ヒサエ・ヤマモト作品集——「17文字」ほか18編』南雲堂フェニックス, 2008年。
- . "Small Talk." *Poston Chronicle*, 30 May, 1943, 6 June 6, 1943.
- . "Yellow Leaves." *Rafu Shimpo*, 20 December, 1986.
- Yogi, Stan. "Japanese American Literature." King-Kok Cheung ed., *An Interethnic Companion to American Literature*. New York: Cambridge UP. 125-155.
- Young, Iris Marion. *Responsibility for Justice*. New York: Oxford UP, 2011.
- 岡田宏明『文化と環境——エスキモーとインディアン』北海道大学図書刊行会, 1979年。
- 小倉孝保『ゆれる死刑——アメリカと日本』岩波書店, 2011年。
- 宮岡伯人『エスキモー極北の文化誌』岩波書店, 1987年。

A Response to the Other: Hisaye Yamamoto's "The Eskimo Connection"

Taeko I. Hiraishi

Soon after World War II, Hisaye Yamamoto worked as a columnist and a reporter for the *Los Angeles Tribune*, an African American weekly. During that period, she participated in the Civil Rights Movement. She also became interested in pacifism and spent two years at The Catholic Worker Farm in New York. Working actively with the other racial and ethnic groups, she widened her perspectives as a Nisei writer, which gave her a unique position in the field of Japanese American literature.

Interethnic bonding is a recurrent theme in the texts of Yamamoto. "The Eskimo Connection," written in Yamamoto's later years is noteworthy for her observation of interethnic relations in the 1970s and the 1980s, when the movement for redress and reparation for the internment during World War II was at its height. This paper will examine Yamamoto's observation of such a transitional period in the Japanese American community.

"The Eskimo Connection" tells of the curious relationship between Emiko, a widowed Nisei poet and Alden, a young Eskimo in a federal penitentiary. Alden initiates a correspondence with Emiko, writing that he had read a poem of hers in a magazine and that he would like to get her comment on an essay he had written for his prison newsletter. Emiko, is at first, very hesitant to respond to Alden because she cannot imagine what they might have in common. However, she finally decides to answer his letter, and a two-year relationship between the two is started.

Emiko gradually comes to understand Alden's isolation and inner struggles. Without knowing the true reason for Alden's incarceration, Emiko begins to sympathize with him because his situation reminds her of her own experience of internment in the wartime camp. Subsequently, she realizes that his anguish is mostly caused as a result of the colonial history of Alaska.

A simplistic reading of "The Eskimo Connection" indicates that Yamamoto seems to have an idealistic view of the interethnic bonding between Japanese Americans and Native Americans in the 1980s. However, it should be noted that Yamamoto, in fact, suggests more ambivalent and nuanced reading of the relationship between them. Emiko, for instance, is an educated middle-class Japanese American widow. She fits in a so-called "model minority." In spite of her sincere responses to Alden, Emiko rejects his request when she is asked to visit his prison and meet him, because she is very busy taking care of her family. Although she knows well how desperately Alden seeks her emotional support, she prioritizes her own family life. By describing Emiko's conflicted reaction to Alden, Yamamoto indicates that there still exist social boundaries which are difficult to overcome even in multicultural and multiracial American society.